

－ 資 料 －

学生の授業評価における記名式と無記名式の有意差 (1)

長 瀬 荘 一

The Differences in Student Ratings of Teaching between Signed and Anonymous Questionnaires (1)

Soichi NAGASE

要 旨

全学共通教養科目の講義「心理学」の連続した計14回の授業の満足度について、10点法による学生の授業評価を記名式と無記名式で調査した。その結果、記名式群と無記名式群との平均点数の差に関し、計14回の授業のうち3回の授業について有意差が、2回の授業について有意傾向があることが確認された。これら5回のいずれも、記名式による方が高い評価値を示したことから、仮説「学生による授業評価においては、記名式による評価の方が無記名式による評価よりも高い評定値が表れる」は概ね支持された。

キーワード：学生の授業評価 student ratings of teaching
記名式による評価 signed questionnaire
無記名式による評価 anonymous questionnaire

問題と目的

日本の大学における授業評価は、平成3年の大学設置基準の改定において大学の自己点検・評価やFDの重要性が指摘されたことにより大きく前進した。しかし、現在、各大学で行われている授業評価の内容と方法はさまざまであり、評価の対象や項目数、実施時期、実施方法、回収方法、結果の公開の仕方など、今後検討しなければならない課題が問題として残されている。その中のひとつに、学生に授業評価をさせる際に記名させるか否か、つまり授業評価アンケートを記名式にするか無記名式にするかの問題がある。これは信頼性のある授業評価を行うために重要な視点のひとつであり、慎重な検討を重ねていく必要がある。このため本研究では、筆者が担当している全学共通教養科目の講義「心理学」を対象にして10点法による学生の授業満足度を授業評価として行わせ、記名式と無記名式の平均点数に有意な差がみられるかどうか調査することを目的とした。

学生の授業評価における記名式と無記名式の差異については、牧野幸志（2003）が両者の評定値の間に有意差がみられないことを報告しており¹⁾、北海道大学評価室（2005）が記名式と無記名式のアンケート評価において統計的な有意差はみられないとする報告を行っている²⁾。近年では、金城・嘉手苺・高橋・賀数・渡久山・金城（2013）が、平成22年度開講科目の授業評価の実施に際して、記名式が評価に及ぼす影響は少ないとして、全国的には多くない記名式による授業評価を実施している事例を紹介している³⁾。これらの先行研究を総括すれば、学生の授業評価において、記名式と無記名式との間に評価結果を左右するほどの大きな差異はみられないとするのがおよその結論である。しかしながら、当該の授業を受講し単位認定を得ようとする学生の立場を斟酌すると、記名式の場合には、やはり授業者との人間関係に配慮して極端に低い評価を避けたり、成績には無関係と告げられたとしても好意的に評価したりする心理が働くであろうことが推察できる。この観点から、国内の先行研究をより広範囲にみていくと、小久保・鈴木・永田・佐藤・川月・内田（2006）は、記名式で実施された授業評価では、全体的な評価点、特に授業の取組についての自己評価点が高くなるとする報告を行っている⁴⁾。また、吉川・有沢・川野辺・内田（2012）は、記名と無記名による授業評価の差は僅差であるとしながらも、記名群の評価は無記名群の評価より高い傾向があるとする報告を行っている⁵⁾。以上の研究結果を踏まえると、本稿ではさらに実証的なデータを積み重ねて、より綿密な分析を行っていく必要があると考え、初めの試みとして、筆者が担当している全学共通教養科目の講義「心理学」全15回のうちの連続した14回を対象にして、10点法による学生の授業評価を行わせて分析することにした。

方 法

本研究では、10点法による学生の授業評価の調査分析を実施するにあたり、「学生による授業評価においては、記名式による評価の方が無記名式による評価よりも高い評定値が表れる」という仮説を設定した。

その上で、筆者が担当している全学共通教養科目の講義「心理学」の連続14回の授業について、各回毎に、記名式で授業評価をする記名群と無記名式で授業評価をする無記名群に分け、出席したすべての学生に授業の満足度を10点満点で総括的に評価させて集計した。

記名群と無記名群の分け方については、調査の公平性を保つために、奇数回（第1, 3, 5, 7, 9, 11, 13回）の授業においては学籍番号が奇数の学生に無記名式で評価させて無記名群（※偶数番号の学生には記名式で評価させて記名群）とし、偶数回（第2, 4, 6, 8, 10, 12, 14回）の授業においては学籍番号が偶数の学生に無記名式で評価させて無記名群（※奇数番号の学生には記名式で評価させて記名群）とした。

学生に授業評価をさせる際には、前もって、目的が研究資料作成のためであること、学生の

成績には何ら影響しないことを説明して、率直な授業評価を促した。

調査の時期

平成26年4月～7月（全学共通教養科目の講義「心理学」、金曜5時限の第1～14回）

調査の対象

平成26年度前期、全学共通教養科目の講義「心理学」の受講届を提出した本学の学生（計129名、全員が女子）のうち各回の授業の出席者

調査内容

全学共通教養科目の講義「心理学」の連続14回の各授業について、授業終了後に授業の満足度を10点法により総括的に評価させた。

調査方法

- (1) 全学共通講義「心理学」の授業前に、1～10の評価点が記入されている2種類の評価用紙のうち、指定する1種類を学生に配付した。
 - ・奇数回（第1, 3, 5, 7, 9, 11, 13回）の授業では、学籍番号が奇数の学生に無記名式の評価用紙を配付した。偶数番号の学生には、記名式の評価用紙を配付した。
 - ・偶数回（第2, 4, 6, 8, 10, 12, 14回）の授業では、学籍番号が偶数の学生に無記名式の評価用紙を配付した。奇数番号の学生には、記名式の評価用紙を配付した。
- (2) 各授業が終了した時点で、学生に、「いま受けた授業の満足度を10点満点で評価してください。これは研究資料のためのアンケートです。皆さんの成績とはまったく関係がありませんので、思ったままを素直に評価してください」と説明した。
- (3) 学生は、それぞれの評価用紙に印刷されている1～10の数字の中から、自分が評価した点数に○印を記入した。
- (4) 学生は、順不同で、記入した評価用紙を教室出口の机の上に置いて教室を退出した。
- (5) 学生が教室を退出した後で、すべての評価用紙を回収し、記名群と無記名群に分けて集計した。

結果と考察

1. 10点法による学生の授業評価の集計結果

表1は、講義「心理学」の第1～14回の授業について、学生が授業の満足度を10点法で評価した結果の集計表である。

各回ともに、上段が記名群、下段が無記名群である。奇数回の授業では、学籍番号が奇数の学生が無記名群となり、偶数回の授業では、学籍番号が偶数の学生が無記名群となっている。

図1は、第1～14回の各授業における評定段階別人数をグラフ化したもので、記名群と無記名群を比較した結果である。

表1 10点法による学生の授業評価 全14回の集計結果

| 評点 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 計 (人) | 平均 (点) | SD | |
|-------------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----------|-----------|------|----------|
| 第1回 記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 14 | 9 | 30 | 55 | 9.2 | 0.95 | ** p<.01 |
| 無記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 8 | 20 | 10 | 22 | 63 | 8.6 | 1.21 | |
| 第2回 記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 5 | 19 | 29 | 56 | 9.3 | 0.85 | n.s. |
| 無記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 15 | 36 | 57 | 9.5 | 0.68 | |
| 第3回 記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 5 | 15 | 32 | 55 | 9.3 | 1.11 | n.s. |
| 無記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 7 | 9 | 16 | 28 | 61 | 9.0 | 1.15 | |
| 第4回 記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 11 | 9 | 12 | 22 | 56 | 8.7 | 1.31 | n.s. |
| 無記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 3 | 11 | 10 | 25 | 52 | 8.9 | 1.37 | |
| 第5回 記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10 | 15 | 16 | 19 | 60 | 8.7 | 1.08 | n.s. |
| 無記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 7 | 16 | 15 | 17 | 60 | 8.5 | 1.28 | |
| 第6回 記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 5 | 14 | 9 | 16 | 47 | 8.6 | 1.33 | n.s. |
| 無記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 5 | 12 | 12 | 26 | 58 | 8.9 | 1.26 | |
| 第7回 記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 9 | 18 | 22 | 51 | 9.2 | 0.86 | † p<.10 |
| 無記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 7 | 10 | 11 | 21 | 51 | 8.7 | 1.44 | |
| 第8回 記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 6 | 13 | 8 | 24 | 53 | 8.8 | 1.26 | n.s. |
| 無記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 4 | 13 | 14 | 19 | 54 | 8.7 | 1.27 | |
| 第9回 記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 | 8 | 12 | 23 | 49 | 9.0 | 1.15 | † p<.10 |
| 無記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 8 | 14 | 14 | 16 | 54 | 8.6 | 1.21 | |
| 第10回 記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 6 | 17 | 26 | 53 | 9.2 | 0.92 | n.s. |
| 無記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 3 | 7 | 8 | 32 | 51 | 9.3 | 1.04 | |
| 第11回 記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 9 | 8 | 26 | 49 | 9.1 | 1.09 | * p<.05 |
| 無記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 4 | 20 | 14 | 16 | 56 | 8.6 | 1.17 | |
| 第12回 記名(奇数) | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 4 | 13 | 13 | 22 | 55 | 8.8 | 1.37 | n.s. |
| 無記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 13 | 11 | 20 | 49 | 8.9 | 1.08 | |
| 第13回 記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 7 | 13 | 27 | 52 | 9.2 | 1.10 | * p<.05 |
| 無記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 10 | 12 | 6 | 25 | 57 | 8.6 | 1.53 | |
| 第14回 記名(奇数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 6 | 14 | 31 | 54 | 9.4 | 0.89 | n.s. |
| 無記名(偶数) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 5 | 13 | 32 | 52 | 9.4 | 0.82 | |

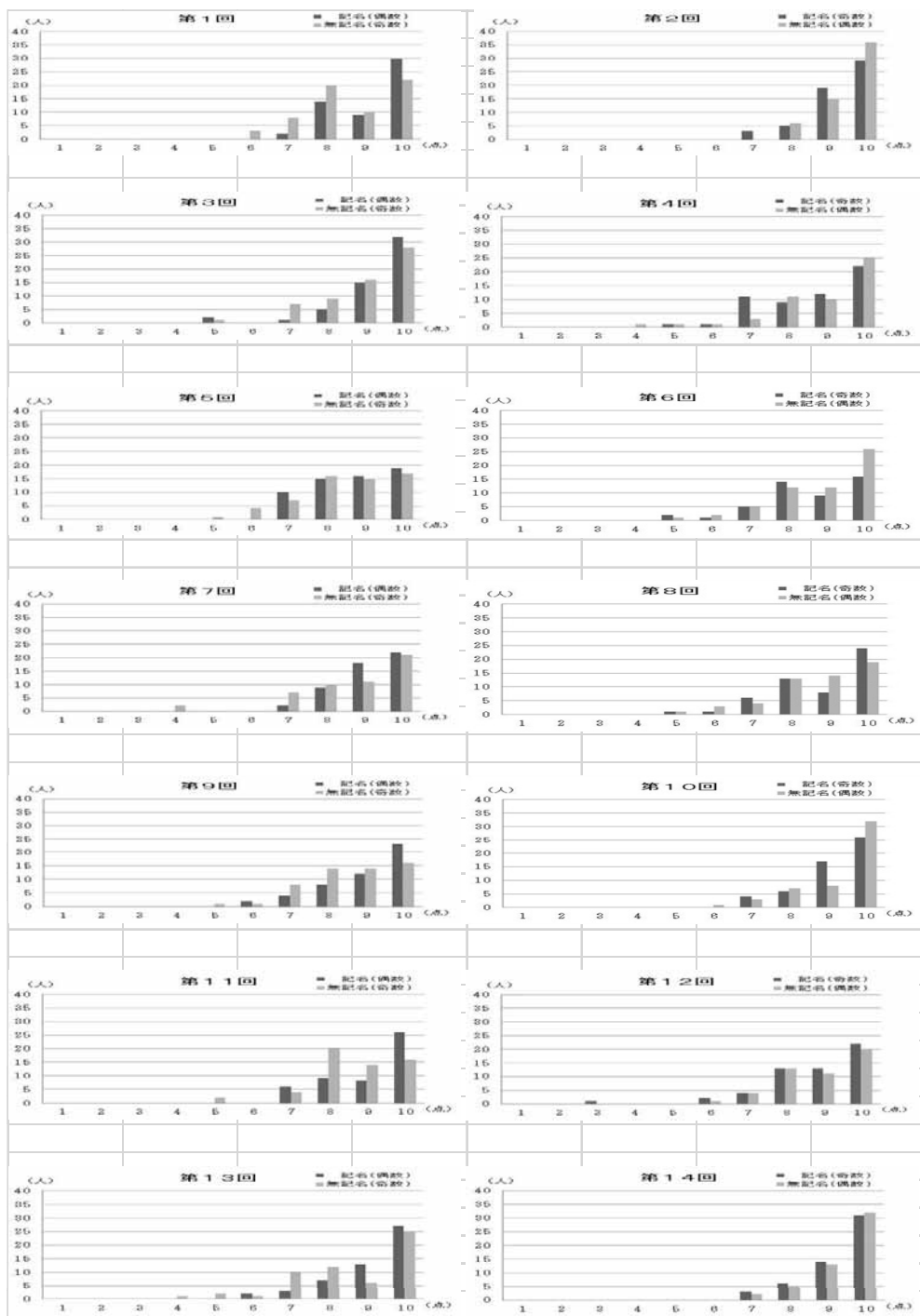


図1 各回における評定段階別人数 (第1~14回)

2. 各授業における分散分析表

表2は、第1～14回の各授業における平均の差を検定するために1要因2水準の分散分析を行った結果である。

表2 各回における分散分析表

表2-1 分散分析表(第1回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|---------|
| 群 | 9.9896 | 1 | 9.9896 | 8.2 ** |
| 誤差 | 141.9850 | 116 | 1.2240 | |
| 全体 | 151.9746 | 117 | | **p<.01 |

表2-3 分散分析表(第3回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|----------|
| 群 | 2.4778 | 1 | 2.4778 | 1.9 n.s. |
| 誤差 | 148.7291 | 114 | 1.3046 | |
| 全体 | 151.2069 | 115 | | |

表2-5 分散分析表(第5回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|----------|
| 群 | 1.4083 | 1 | 1.4083 | 1.0 n.s. |
| 誤差 | 168.7167 | 118 | 1.4298 | |
| 全体 | 170.1250 | 119 | | |

表2-7 分散分析表(第7回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|---------|
| 群 | 4.7451 | 1 | 4.7451 | 3.3 † |
| 誤差 | 143.0980 | 100 | 1.4310 | |
| 全体 | 147.8431 | 101 | | † p<.10 |

表2-9 分散分析表(第9回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|---------|
| 群 | 4.3036 | 1 | 4.3036 | 3.0 † |
| 誤差 | 143.8129 | 101 | 1.4239 | |
| 全体 | 148.1165 | 102 | | † p<.10 |

表2-11 分散分析表(第11回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|--------|
| 群 | 5.5102 | 1 | 5.5102 | 4.2 * |
| 誤差 | 135.3469 | 103 | 1.3140 | |
| 全体 | 140.8571 | 104 | | *p<.05 |

表2-13 分散分析表(第13回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|--------|
| 群 | 8.4473 | 1 | 8.4473 | 4.6 * |
| 誤差 | 196.4885 | 107 | 1.8363 | |
| 全体 | 204.9358 | 108 | | *p<.05 |

表2-2 分散分析表(第2回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|---------|-----|--------|----------|
| 群 | 1.1858 | 1 | 1.1858 | 2.0 n.s. |
| 誤差 | 66.4248 | 111 | 0.5984 | |
| 全体 | 67.6106 | 112 | | |

表2-4 分散分析表(第4回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|----------|
| 群 | 1.1754 | 1 | 1.1754 | 0.6 n.s. |
| 誤差 | 193.1209 | 106 | 1.8219 | |
| 全体 | 194.2963 | 107 | | |

表2-6 分散分析表(第6回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|----------|
| 群 | 2.3492 | 1 | 2.3492 | 1.4 n.s. |
| 誤差 | 174.6985 | 103 | 1.6961 | |
| 全体 | 177.0476 | 104 | | |

表2-8 分散分析表(第8回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|----------|
| 群 | 0.4303 | 1 | 0.4303 | 0.3 n.s. |
| 誤差 | 171.6258 | 105 | 1.6345 | |
| 全体 | 172.0561 | 106 | | |

表2-10 分散分析表(第10回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|----------|
| 群 | 0.1981 | 1 | 0.1981 | 0.2 n.s. |
| 誤差 | 100.2634 | 102 | 0.9830 | |
| 全体 | 100.4615 | 103 | | |

表2-12 分散分析表(第12回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|----------|-----|--------|----------|
| 群 | 0.3631 | 1 | 0.3631 | 0.2 n.s. |
| 誤差 | 160.4735 | 102 | 1.5733 | |
| 全体 | 160.8365 | 103 | | |

表2-14 分散分析表(第14回)

| 要因 | SS | df | MS | F |
|----|---------|-----|--------|----------|
| 群 | 0.2168 | 1 | 0.2168 | 0.3 n.s. |
| 誤差 | 77.1417 | 104 | 0.7417 | |
| 全体 | 77.3585 | 105 | | |

3. 各授業における記名群と無記名群の比較

図2は、第1～14回の各授業における記名群と無記名群の平均点をグラフ化した図である。

図2 aは、評定値8～10点の範囲を拡大した図である。

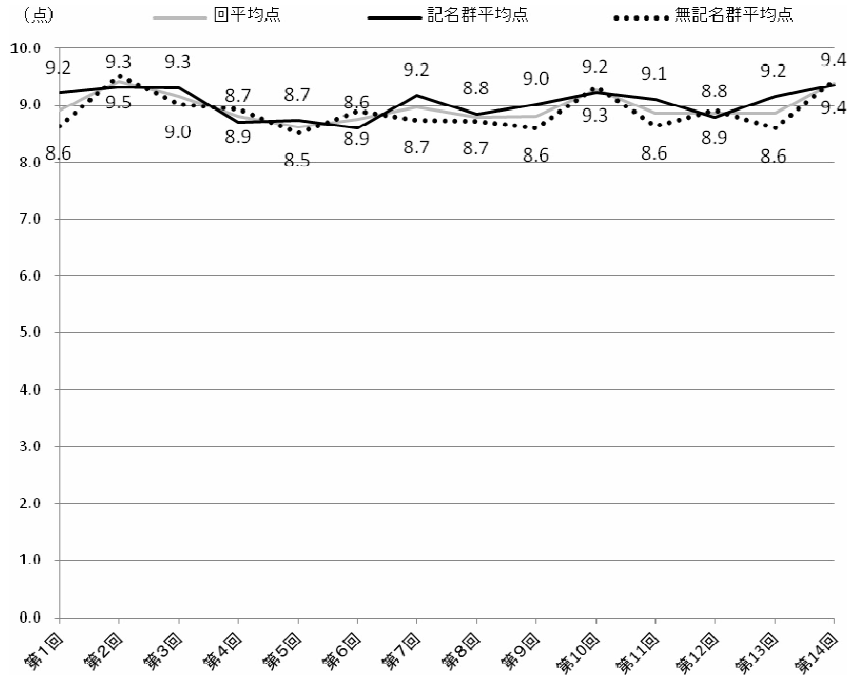


図2 記名群と無記名群の平均点

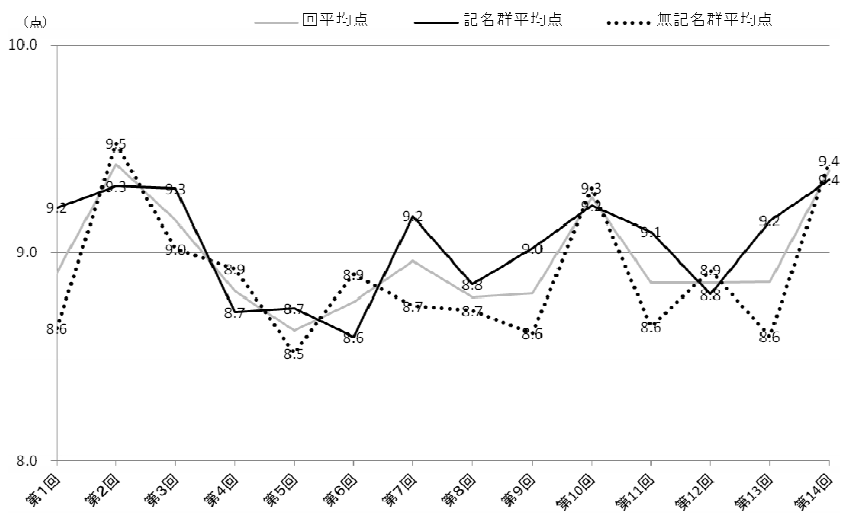


図2 a 記名群と無記名群の平均点 (拡大図)

4. 記名式による評価と無記名式による評価の有意差

全学共通教養科目の講義「心理学」の第1～14回の各授業について1要因2水準の分散分析を行った結果、記名群と無記名群との間に $p < .01$ 水準で有意差が認められたのが1つの授業、 $p < .05$ 水準で有意差が認められたのが2つの授業、 $p < .10$ 水準で有意傾向が認められたのが2つの授業であった。全14回の授業のうちの5つの授業において有意差ないしは有意傾向が認められたことから、本調査の仮説「学生による授業評価においては、記名式による評価の方が無記名式による評価よりも高い評定値が表れる」は概ね支持されたと考えられる。

但し、仮説が支持された授業には共通点があり、それは第1, 7, 9, 11, 13回といずれも奇数回の授業になっている点である。すなわち仮説が支持された授業は、奇数番号の学生が無記名の授業評価を行った場合のみである。偶数番号の学生が無記名の授業評価を行った場合には、どの回の授業でも有意差はみられなかった。奇数番号と偶数番号の類別は、学生の入学時の学籍番号によるもので、教務事務上の機械的な類別であるが、今回の授業評価においては、奇数番号の学生の方が偶数番号の学生に比べて、ほとどの授業も低い評定値を示しているのが特徴である。詳細に言えば、全14回の授業評価において、奇数番号の学生の評定値が高かったのは1つの授業に止まり、奇数番号と偶数番号の学生が同点だったのが1つの授業、残り12の授業はいずれも、最高0.6～最低0.1点の幅をもって奇数番号の学生の方が低い評定値となっている。このことを踏まえれば、今回の学生の授業評価においては、低い評定値を示す奇数グループが無記名群になった場合にのみ統計的な有意差又は有意傾向が表れたことになる。さらに、今回の結果を解釈するにあたって、いまひとつ留意しなければならないのは、学生の評定値の平均が、どの授業も10点満点のおよそ9.0点前後と高い水準で推移したことである。このため、評価の天井効果が生まれたことが予想できる。今回の調査結果は、これら2つの要因が複合してもたらされたとも考えられ、記名式による評価と無記名式による評価の有意差については、さらにデータを重ねて検討する必要がある。

以上に述べた通り、本調査の仮説「学生による授業評価においては、記名式による評価の方が無記名式による評価よりも高い評定値が表れる」は概ね支持されたものとするが、今回の調査の固有の特性と思われる結果もみられ、今後さらに調査を継続して解明する必要がある。

引用文献

- 1) 牧野幸志, 学生による授業評価の規定因の検討(3) —記名式による調査が授業評価に与える影響—, 高松大学紀要, 40, 63-75 (2003)
- 2) 北海道大学評価室, 平成16年度授業アンケート特別版(記名式)分析結果報告(2005)
- 3) 金城忍・嘉手苺英子・高橋幸子・賀数いづみ・渡久山朝裕・金城芳秀, 学生の授業評価を正確に反映する評価項目について—平成22年度開講の授業科目における学生による授業評価アンケート得点の傾向から—, 沖縄県立看護大学紀要, 14, 97-104 (2013)
- 4) 小久保吉裕・鈴木道隆・永田正義・佐藤邦弘・川月喜弘・内田仁, 記名式と無記名式授業評価アンケート

- トの比較, 第12回大学教育研究フォーラム発表論文集, 40-41 (2006)
- 5) 吉川政夫・有沢孝治・川野辺裕幸・内田晴久, 構造化された授業評価アンケートの開発, 大学論集, 広島大学高等教育研究開発センター, 43, 337-351 (2012)